

2022年度文系チャレンジ講座（第5回）を実施しました

10月19日（水）に経済学部で城戸 照子先生を講師に迎え、「世界史の貨幣の流れから何を学ぶか～信用の発明～」というテーマで、文系チャレンジ講座第5回を実施しました。安心院、国東、別府翔青、大分雄城台、大分鶴崎、大分西、臼杵、竹田、三重総合、中津南、日田、大分舞鶴、大分豊府、芸術緑丘、大分東、玖珠美山、津久見、日出総合、大分の20校328名が受講しました。



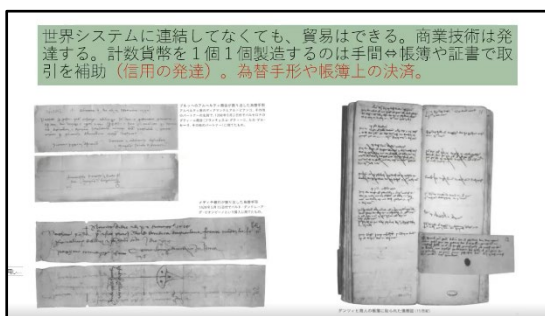
城戸照子（大分大学）



城戸照子先生は中世イタリア社会経済史を主な研究テーマにされており、はじめに大分駅前にある大航海時代の世界地図を示し、「IAPAN」や「BVNGO（ぶんご）」が記されていることを生徒達に気付かせ、またユネスコ世界文化遺産に登録された島根県の石見銀山の「銀」が世界市場に流通していた頃の地図であると説明されました。

まず17世紀の近代世界システム論として、ヨーロッパを中心に「銀」が流通しており、その「銀」の産地として日本（石見銀山）、南アメリカ（ボリビアのポトシ銀山）などがあり、さらにヨーロッパに「銀」を流入させるスペイン王国の貿易によって東南アジアにも「銀」が流入し、世界を結んだことが後のグローバル・ヒストリーの土台となったと説明されました。

また15世紀～19世紀のグローバルな交易ルートとして、「銀」が中国に集中しており、アジアが経済の中心であった



ことや、「銀」

がアジアとヨーロッパを中心に世界をめぐりグローバルな経済を形成していた（「銀」が決済に用いられた）ことがうかがえると説明していただきました。

当時のヨーロッパはアフリカから金を、日本などから銀を輸入しており、貨幣の製造においては原材料が豊富でないことと手間がかかることから、帳簿や証書で取引を補助

するようになり、「信用における取引」ができるようになった（貸方借方の信用）ことを説明されました。このようなことが「信用の発達」につながり為替や帳簿上の決済を行うようになっていったと話をされました。

受講生からは「グローバル経済はヨーロッパのイメージがあったが、13世紀からアジア史も重要であることが分かり驚いた。信用の大切さが分かった」、「地図や写真など、資料をたくさん用いていたので、興味深く、面白い授業だった」、「予想以上に経済学の内容が深く、視野を広げたい」等の感想が寄せられました。

附：日本史における貨幣の勉強のためには

→日銀の貨幣史博物館参照がマスト。中世は凄い！日常使いは中国から輸入した銅銭です。

・<https://www.imes.boj.or.jp/cm/history/content/>

貨幣史博物館のwebサイトが、興味深いですよ。おすすめ。

「12世紀半ば以降、中国から銭貨が大量に流入すると、銭貨の使用が人々の間で浸透し、商品経済が発達した。日本では、16世紀まで国家が貨幣を発行せず、人々は渡来銭を使用した。しかし、銭貨需要の高まりとともに私鑄銭が増加し、銭貨の質にばらつきが生じると、人々が銭貨を選び劣悪な銭貨の排除など（揀銭）が行われるようになり、銭貨の流通は混乱した。16世紀後半、中国からの銭貨流入が途絶えると、米（商品貨幣）や金・銀が貨幣として使用されるようになった」

→「信用」があれば、小額貨幣を造幣しなくても、経済はまわる。